

## 1. ウズベキスタンの概況

ウズベキスタンは中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和国で 1991 年 12 月にソ連の解体とともに独立した。政府は共和国在住希望者に、民族・宗教関わらずにウズベキスタン国籍を与えたため、多民族国家である。その意図は、希望者全員に国籍を与えることにより、国民統合を図り、ウズベキスタン人というアイデンティティーの共有を目指すためだった[1-31~32]。面積は 44 万 7,400 平方キロメートルと日本の約 1.2 倍だが、人口は 2780 万人(2008 年)と日本の人口の 1/5 強と少ない。公用語はウズベク語とロシア語が使用されている。宗教は主としてイスラム教のスニ派だ。主要産業は綿繊維産業・食品加工・機械製作・金・石油・天然ガスである。一次産業が主体の経済であり、産業の高度化が課題である[2]。

## 2. ウズベキスタン経済の現状

ウズベキスタンは河川・オアシスを利用した安定的な農耕経済と地の利を得た通商が行われてきたため、中央アジアの中では比較的安定した農業環境であった。また、多民族国家でありながらも、ウズベク人が 3/4 と多数をしめているため、社会的にも比較的安定していた。このような背景から斬新主義をスローガンに安定志向の政策がなされてきた。しかし、91 年の独立直後に深刻な経済混乱を経験した。93 年までは国内の生産・供給を重視し、財政支援を行ってきたが、94 年以降は I M F 指導のもと財政、金融引き締めを図るとともに、国営企業の民営化を推進した。この間、G D P はマイナス成長を続けたが、政府がエネルギー資源開発部門に注力して石油・ガスの自給を達成し、食糧の自給体制の整備を進めた。結果、96 年～プラス成長に転じた[3-37~39]。

ウズベキスタンの GDP 成長率は 2000 年以降、毎年 4%前後で推移し 2004 年以降は 7%以上の成長を記録しており、2007 年には 9.5%、2008 年(1-9 月)は 9.4%の伸びを示しプラス成長をし続けている。

資料3. ウズベキスタンの主要品目別輸出入

	輸出 (FOB)					輸入 (CIF)			
	2006年		2007年			2006年		2007年	
	構成比	構成比	伸び率	構成比		構成比	構成比	伸び率	構成比
綿繊維	17.2	12.5	2.8	9.6	機械・設備	47.0	46.6	8.5	49.7
エネルギー製品	13.1	20.2	2.2倍	21.7	化学品・プラスチック製品	13.8	14.8	17.0	12.9
鉄鋼・非鉄金属	12.9	11.5	25.4	7.0	鉄鋼・非鉄金属	6.7	8.3	36.4	8.3
サービス	12.1	10.7	24.6	8.7	サービス	8.4	7.4	△ 3.2	5.3
機械・設備	10.1	10.4	44.3	7.5	食料品	7.7	7.9	12.7	7.9
食料品	7.9	8.5	50.7	3.8	エネルギー製品	4.2	3.3	△ 12.3	4.5
化学品・プラスチック製品	5.6	6.8	72.4	5.6	その他	12.2	11.7	4.4	11.4
その他	21.1	19.4	29.1	36.1					
合計	100.0	100.0	40.7	100.0	合計	100.0	100.0	9.5	100.0

GDP 構成で見ると 2000 年時点では農業が 30%を占めているが、急速に鉱工業が拡大し 2007 年には 24%で農業(22%)を上回る規模に成長していることが分かる。2008 年の GDP

伸び率も前年同期比 9.4%、鉱工業生産は前年比 12.4%増、農業生産 4.1%増、固定資本投資額 22.4%増、建設 8.4%増、小売売上高 15.0%増、輸出 62.9%増、輸入 13.5%増と農業生産を除きすべてがプラス成長である。「この背景には金、ウラン、非鉄金属、綿花など同国の主要原材料の国際価格が高値で推移していたこと。ロシアやカザフスタンなどの主要貿易相手国の経済が好調で輸出が活発であったこと。これらの国を含め韓国、UAE など外国への出稼ぎ者からの送金額が相当額に上っていることなどがある」[4]。

ロシアへ一次産品を供給し依存していたウズベキスタン経済が 1990 年代初頭にこのチャンネルが崩壊し、大きな打撃を受けたが、政府機関と共産党が一体となった中央体制が市場経済移行の目標を打ち出し、存続することができた。だが、ウズベキスタン経済を支えてきた鉱物資源、綿花の国営企業の生産活動は立ち直る能力に欠けていた。綿花、鉱物資源の輸出のシフトとエネルギーの自給、食料品の自家栽培という安定供給のバザールに象徴される経済活動と光水熱、交通、教育等の基礎的な生活ニーズの社会保障の配慮がウズベキスタン経済の緩和剤として大きな役割を果たしてきたといえる[3-211～213]。

### 3. ウズベキスタン経済の今後の展望

ウズベキスタンは独立後、漸進主義をスローガンにしてきたが、それは国家による統制を正当化する手段に過ぎなかったと思う。市場経済化からはほど遠く、国家が管理・統制するというシステムが構築されてこなかった。ウズベキスタン経済は国家に管理されていたため、生産低下を最小限に抑えることができ、回復も早かったが、近年ウズベキスタンの綿花モノカルチャ経済は行き詰まってきており、国際機関や欧米諸国からも市場経済化が強く求められている。上記でウズベキスタンの GDP は96年からプラス成長を続けていると述べたが、マクロ状況はうまく動いていると言えても、1人当たりの GDP は 800ドル程度であり、一般のウズベク人は豊かな生活を送っているとは言えない。石油高の影響もあって物価は上昇し、仕事はあまりなく、若者は国外へ流出している。ウズベキスタンは早急にシステムの転換を図る必要があると思う。

最近では、アンディジャン事件が記憶に新しいが、それ以降、国際関係についてもロシアに頼っている傾向があるように思う。アメリカ、EU との関係が悪化傾向にあるが、以前として日本には親近感をもっているし、友好関係を持ちたいとウズベキスタンは思っている。なので、ウズベキスタンの経済を改革していくためには、日本の役割が極めて重要になると思う。

ウズベキスタンは91年に独立を果たし、まだまだ若い国であるので、学校、病院の建設や、人材育成、日本からの技術提供に力を入れていく必要があるのではないだろうか。また、観光においては、ますます発展していく国であると思う。実際に、歴史的建造物を目的に観光客が増加し、ホテル建設などにも力を注いでいる。しかし、日本に友好的な国でありながらも、日本人観光客がほとんどいないのが現状だ。その理由は、ウズベキスタンという国の情報が少なすぎるためであると思う。ウズベキスタンには素晴らしい世界遺産がい

くつも存在するので、改革次第では観光産業がこれから大いに発展することが期待できると思う。市場経済化が進めば、今まで保護されてきた産業は打撃を受け、経済は長く停滞すると思うが、このまま国家管理システムを維持するよりは、ダメージは軽くすむと思われる。また、天然資源輸出へのポテンシャルを強く持ち、経済成長の原動力となる直接投資をひきつけることも重要だと思う。何よりも市場経済化、特に貿易規制の大幅な緩和を積極的に推進していけば、ウズベキスタン経済は確実に良くなっていくと考えた。

{ 資料リスト }

1. ティムール・ダダバエラ 『社会主義後のウズベキスタン』 アジア経済研究所 2008 年
  
2. 外務省、ウズベキスタン  
<http://search.jword.jp/cns.dll?type=lk&fm=127&agent=11&partner=nifty&name=%B3%B0%CC%B3%BE%CA&lang=euc&prop=500&bypass=2&dispcnfig> 2009 年 6 月 24 日確認
  
3. 北村歳冶 『中央アジア経済～市場移行国の背景と課題』 東洋経済新報社 1999 年
  
4. 独立行政法人日本貿易保険、W E B マガジン、バックナンバー、ウズベキスタンとトルクメニスタンの経済現状  
[http://nexi.go.jp/service/sv\\_syuppan/magazine/sv\\_e-nexi\\_backnumber\\_frame.html](http://nexi.go.jp/service/sv_syuppan/magazine/sv_e-nexi_backnumber_frame.html)  
2009 年 6 月 24 日確認